

In the forest

永井 真実

有沢 聡

近藤 郁雄

隣の部屋の住人

ガソリンスタンドの店員

※太字部分は思っていること、実際には喋っていない、声のみ

1

暑い昼

永井、灯油用のポリタンクを持ち、車に乗り込む

エンジンを始動し、シートベルトを締める

カーステレオのボリウムを大きくし、ぼんやりとしている

シートベルトを外し、車を進ませる

永井、つぶやくように

永井 汚いかも。

ブレーキを踏み、急停止

シートベルトを締め、車を進ませる

1

2

寒い夕暮れ

有沢のアパート

永井が階段を上ってくる

永井 **まどわりつく人**

独りぼちの人

私はどっちの人

どっちも人。

私は光の当たらない人。きつとそう、そんな人

有沢の部屋の前に到着し、立ち止まる。

しばし、ぼんやりとドアを見つめ

永井 今日も一日暑かったです。

顔がてかっています。

永井 思い立ったようにドアを激しく叩く

隣の部屋から住人が出てくる

目が合う

永井は無機質に隣の住人を見つめ、隣の住人はその視線に辛くなり、視線をそらし、出かける

隣の住人が見えなくなってから

永井 あ、どうも、こんにちは。暑いですね。

必要最小限の挨拶すら出来なかった。

永井 再びドアを激しく叩く

しばらく叩いた後、靴から鍵を出し、ドアを開け中へ入る

玄関に立ったまま

永井 あの人は私をどんな風に思ったのだろう。

この住人。友達

お金を貸してた人。身体を貸してた人。…心を貸してた人。

冷たい目で見てた。

こんなに暑いのに。

人の気持ちは、気温とは関係ないということが証明された。

永井 だいたい。…こんにちは。

永井 部屋に入る

部屋にあるものもそうだが、空気自体も雑然としている

永井 暑い。

永井 窓を開ける

永井 臭い。

ため息をついてから、ベットに横になる

3

熱い昼

永井が運転している車がガソリンスタンドに入っていく

店員 いらっしやいませ。

永井 車を給油場所とは違つ中途半端な場所へ止める

店員 長居の車の側へ走り寄る

店員 いらっしやいませ。
どうしました。

永井 灯油ください。

店員 あ、灯油ですか。かしこまりました。
そちらのホリでよろしいですか。

永井 はい。

店員 軽快に助手席の足元に積んであるホリタンクを降ろし

店員 18ℓでよろしいですか。

永井 あ、はい。

いや、10ℓで。

店員 10ℓですね。

永井 はい。

店員 はい。かしこまりました。

店員 慣れた手つきで給油する

永井 暑いですね。

店員 そうですね。暑いですね。

永井 大変ですね。

店員 そうですね。でもまあ、仕事ですから。

店員 給油し終わり、蓋をしながら

店員 助手席でよろしいですか。

永井 はい、すみません。

店員 灯油を助手席にのせる

店員 吸殻、お捨ていたしましょうか。

永井 あ、お願いします。

店員 一応、灯油積んでますからね、タバコは控えた方が良いでしょう。

永井 はい。

店員 少々お待ちください。

店員 灰皿を持ち、事務所に会計をしに行く

永井 どうしてそんなに親切なの。仕事だから。

仕事だから、親切じゃないの。

こんな暑い日に、この灯油の意味なんてもうとも良いですか。

店員 戻ってくる

店員 ???田になります。

永井 払う。

店員 はい、ちようどいただきます。

永井 どうも。

店員 またお願いいたします。

あ、どちらの方へ行かれます。

永井 大丈夫です。適当に出ます。

店員 よろしいんですか。

永井 暑いですから。

店員 ありがとうございます。

永井 車に乗り、ガソリンスタンドを出て行く

永井 嘘

見てて。

親切にしてくれるんだったら、ずっと見てて。

店員 車が出て行くのを見て、事務所に戻る

4

4

鬱々な夜

永井の部屋、電気もつけず暗い

永井部屋の中央に立っている。

腕を伸ばしたりする

5

熱い昼

車の中、車が少ない駐車場

窓を開け、車内で永井がぼくつとしている

永井 灯油臭い。

永井、タバコを取り出して吸う。

灰皿を開ける

永井 変な匂い。

これか。(灰皿内の匂い玉)
この匂い。
灯油の匂い。
私の匂い。
臭い。

6

動かない屋
有沢の部屋
一心不乱にゲームをする有沢
膝を抱えてベットに座る永井

永井 ねえ。
有沢 : 何。
永井 帰る。
有沢 :

有沢のゲームをする手が止まる

有沢 どこに。
永井 私の部屋。
有沢 待つて。今やめるから。
永井 いいよ。やつてて。
有沢 やめる。

有沢、バタバタとゲームの電源を落とし、テレビを消す

永井 別にそんなんじゃないから。
有沢 悪かったつて。
永井 本当にそんなんじゃないから。
有沢 飯でも食いに行く。
永井 いい。
有沢 どっか行く。
永井 帰る。
有沢 : どこに。
永井 部屋借りたの。
有沢 : いつ。
永井 この前。
有沢 この前つて。
永井 この前。
有沢 : 何で。

5

永井 ：
有沢 別れるってこと。
永井 何で。
有沢 出て行くつて。
永井 別れたいの。
有沢 いや。
永井 じゃあ、別れなくていいんじゃないの。
有沢 ：

永井、ベットから立ち上がり

有沢 真実、俺、訳分かんないよ。
永井 また来るよ。
有沢 ちょっと待って。
永井 ：
有沢 飯食いに行こう。
永井 いいよ。なんか作る。
有沢 ：
永井 ちょっと待ってて。

永井、冷蔵庫の方へ
冷蔵庫を開け、しばらく中を眺め、無造作に食材を取り出す

永井 何でも良いでしょ。
有沢 うん。

永井、慣れた手つきで料理する。
有沢、立ち上がり、長いの傍へ

有沢 何で部屋借りたの。
永井 ：
有沢 何か、不満
狭いとか。
永井 ：
有沢 引越すならさ、一緒に引越せば良いじゃん。
永井 ：
有沢 別に別れたいわけじゃないんですよ。
永井 ：
有沢 なあ、真実。

永井、料理の手を止めて

永井 別に別れたくないわけでもないんだよね。
有沢 ……どういう意味。
永井 何かさ ……どつちでも良い。
有沢 ……
永井 座って待っていていよ。
有沢 ……
永井 ……
永井 暑いね。
有沢 ……

永井 料理に戻る

永井 鼻唄まじりに機嫌良さそうに料理する

永井 ちよつと焦げちやつたけど、良いよね。
有沢 ……

7

動かない昼

テーブルの上に綺麗に食ひ終わった皿

永井 タバコを取り出し、吸い、食ひ終わった皿に無造作に灰を捨てて
いく

7

有沢 真実。
永井 あ、どうだった。
有沢 ……うん、美味しかったよ。
永井 ありがとう。
有沢 ……なあ。
永井 何。
有沢 納得できない。
永井 料理。
有沢 そっじやなくて。
永井 ……
有沢 ちゃんと話そうよ。
訳わかんないよ。
不満あるならば、言つてよ。
永井 料理褒めて。美味しかったって。
有沢 褒めたじゃん。
永井 もつと褒めて。
今は、褒めて欲しいの。
有沢 ……美味かった。本当に美味かったよ。
永井 ありがとう。

有沢 ・・・
また作る。また食べて。

永井 タバコを吸い終わり、皿を片付ける
有沢 やり場のない思いになたれる

8

静寂の夜

永井、川沿いを歩いている、ふと立ち止まり、川岸に白い何か（舟）を見つめる。しばらく見つめ、その後歩き出す

9

静寂の夜

永井の部屋。生活感がまるでなく、必要最小限の家財道具しかない
紙で折った白い舟が散らばっている
永井、テーブルのような物の上で白い紙で舟を折っている
出来上がると、その辺に放り投げていく
その後、また違う白い紙を取り出し、ペンで以下のことを書く

永井 川に魚がいた。金色の目で私を見る。
空に星がいた。金色の目で私を見る。
私は両方に立ちたい。
私は両方に見られたい。
私の目は黒い。
私の目は暗い。

8

書いた紙を折り、白い封筒を取り出し、その紙を入れる。

10

静かな昼

学食、たくさんの方がいる
永井、一人で座っている。
テーブルの上には昼食がのっているが、昼食には目もくれず何を見るでもなく正面を見て座っている
近藤、自分の昼食を持って、永井の向かいの席に座る

近藤 よっ。

永井 ・・・

近藤 暑いな。

永井 久しぶり。

近藤 食べないの。
永井 食べるよ。
近藤 ぼくつとしてたね。
永井 ……そう。
近藤 暑いもんね。
永井 暑いね。
近藤 エアコンくらい入れて欲しいよね。
永井 いただきます。
近藤 ……いただきます。

永井 昼食を食べる

近藤 少しの間永井の様子を見て、自分も食べる

近藤 何考えてたの。
永井 ……
近藤 何か、面白かったよ。
永井 何が。
近藤 目の前に飯置いてんのに、背筋伸ばしてぼくつとしてんの。
永井 背筋伸ばしてた。
近藤 伸ばしてた。
近藤 昼飯はもうあるのに、でもそっち全然見てなくて、ぼくつと前見て、変だよ。
永井 変。
近藤 うん、変。
永井 ……そう。

永井 食事に戻る

近藤 就職決まった。
永井 ……決まった。
近藤 いいね。何。
永井 地元の企業
近藤 地元どこだっけ。
永井 北海道。
近藤 ……牧場。……毎日乳搾り。なんてな。
永井 ……乳搾られるの。
近藤 ……
永井 ……
近藤 試させてよ。
永井 ……
近藤 マジで。
永井 近藤は。

近藤 何が。
永井 就職。
近藤 …駄目じゃない。
永井 明るいね。
近藤 多分さ、俺、結構今の生活に色んなところで不満持ってるからじゃない。
永井 ……
近藤 聡元気。
永井 ……元気ないと思う。
近藤 あら。何で。
永井 ……多分、別れたから。
近藤 ……そう。
永井 驚かないの。
近藤 自分だって元気ないじゃない。
永井 ……
近藤 ないよ。
永井 ……
近藤 今日さ、デートしない。
永井 ……
近藤 どう。
永井 ……元気ないから。
近藤 嘘、ありそうだよ。
永井 ……自信がないから。
近藤 ……
永井 明日、
近藤 明日、
永井 天気良いと思う。
近藤 ……良いんじゃない。こんな暑いし、悪くなりそうな要素がなにもないよね。
永井 だね。…多分、晴れ。
近藤 何。
永井 最近さ、明日の天気も決められない。
近藤 ……
永井 多分、それだからだと思う。
近藤 重症。
永井 そうかもね。
近藤 ……

永井 各皿を半分を程残し

永井 ごちそうさま。
近藤 残ってるよ。
永井 食欲はあるよ。食べたいって思うし。
今日はね、誰かが作ったものを食べたくなくなったの。

でも私の知らない人の作ったものを全部食べる勇気がなかった。
近藤 ∴
永井 それだけ。
近藤 そっか。

永井 立ち上がる。

近藤 永井、デートして。
永井 そのうち。

永井 食器を持って去る。

11

熱い昼

永井 川沿いを歩いている
手には紙の舟と封筒を持っている
速くに一本気が見えるところで立ち止まる
川のすぐ傍に立ち、しゃがみこんで、持っていた紙の舟に封筒をのせ、流す
再び木を見る

永井 風が吹く。でも葉は落ちない。
雨が降る。でも葉は落ちない。
風が止む。でも葉は落ちない。
それが羨ましい。
今日もまた 緑が美しい。

11

永井 視線を川に浮かべた舟へ
舟、水面に漂い、美味く流れていない
永井 川に手を入れ、波を作るが、舟は流れない、揺れるだけ

12

凜猛な夜

永井の部屋

永井、テーブルのような物の上の紙にむかい、何かを書いている
傍らにはジャックダニエルの瓶とグラス
ドアをノックする音
永井、無視しているのか気付いていないのか、そのまま何かを書いている
ドアを叩く音
永井、立ち上がり、玄関に向かいドアを開ける
有沢が立っている

二人、部屋と外の境界で見つめあう

永井 入る。
有沢 うん。

二人、部屋へ

永井 適当に座って。

永井、有沢の来る前と同様に何かを書く
有沢、その姿を見ながら立っている

有沢 俺、死にそうだよ。
永井 生きてる証拠だね。
有沢 真実は平気なの。
永井 どうなんたる。
有沢 俺はさ、平気じゃない。
永井 そうみたいだね。

有沢、めきらめてその辺に座る

有沢 ……何してるの。
永井 詩を書いているの。
有沢 ……飲んでるの。
永井 飲んでる。
有沢 ……俺も飲んで良い。
永井 酔えないよ。
有沢 ……
永井 全然酔えないよ。
有沢 ……いいよ。
永井 ちょっと待ってて。
有沢 ……

永井、その辺の紙の下に埋もれている封筒を探す
書いていた紙を折って、その封筒に入れる
永井、立ち上がり、紙コップを持ってきて、有沢に渡す

永井 これしかないの。
有沢 いいよ。

永井、有沢の紙コップに酒を注ぐ。その後自分のグラスに酒を注ぐ

有沢 どっかに送るの。
永井 ∴
有沢 封筒に入れてたから。
永井 ∴流すの。
有沢 ∴
永井 何。
有沢 いや。
永井 用があつたから来たんでしょ。
有沢 ああ。

有沢 紙の舟を手取る

有沢 舟。
永井 ∴
有沢 いつから飲めるようになったの。
永井 ∴最近。
有沢 今日さ、近藤から電話あつた。
永井 昼に学食であつた。
有沢 ∴
あ、そらだ、乾杯。

有沢 永井のほらに紙コップを差し出す

永井 ∴
有沢 ∴再会に。

永井 無言でグラスを合わせる
有沢 きつそりに飲む
永井 水のように飲む

有沢 きつくない。
永井 ∴

永井 更に飲む

有沢 近藤さ、いきなり「おめでとう。」って言いやがった。
永井 ∴
有沢 俺さ、死にそつだよ。
永井 ∴
有沢 星出てたよ。
明日は晴れたよ。
永井 ∴

有沢 …

永井、立ち上がり、腕を拡げる

永井 腕をね、拡げたくなったの。

有沢 …

永井 ただそれだけ。

別れたいとか、別れたくないとか、そんなんじゃないの。

理解できないかもしれないけど。

本当にそれだけなの。

有沢 …

永井 酔えないでしょ。

有沢 …うん …酔えない。

永井 不思議だよ、ね。

有沢 …不思議だ。

永井 見て。

有沢 見てるよ。

永井 もっと良く見て。

有沢 …

永井 どんなに手を拡げても、私の手は二本しかない。

有沢 …

永井 聡。

有沢 何。

永井 今満足してる

有沢 …さあ。

永井 近藤かね、今の生活に色々不満があるから明るいんだって言った。

有沢 …

永井、座る

永井 神様ってさ、腕が4本とか6本とかあるじゃない。

だから神様なんだよ。

近藤が神様に見えた。

有沢 神様って良い奴ばかりじゃないぜ。

永井 …そっか。

有沢 あいつはさ、悪い奴のタイプだよ。

永井 …そっかもね。

有沢 今日の電話でさあいつ何て言ったと思う。

永井 おめでとらうって言ったんでしょ。

有沢 その後。

「今度は俺におめでとらうって言え。」って言いやがったんだぜ。何でって聞いたら「そのうち永井とデートすることになったから祝福する。」だって。

永井 …心配してくれてるんだね。

有沢 …

この部屋暑くない。

永井 …暑いね。

有沢 紙コップの酒を飲み干す

有沢 帰る。

永井 …うん。

有沢 また来る。

永井 …うん。

有沢 立ち上がり、帰る

永井 一人になり、先ほど紙を入れた封筒を手に取り、紙を取り出す

永井 河原に立つ。辺りを見渡す。

川がある。水が流れる。

私は何でこんなに狭いんだ。

私はいつからこんなに窮屈なんだ。

細くても良い。浅くても良い。流れて往けるなら。

13

永井 アスファルトの上を歩いている

有沢 部屋でぼくつとしている

近藤 研究室で漫画本を読み、周りの人とたわいない会話をしている

永井 学食で一人で昼食をとる。半分ほど残し、食器を下げる

永井 川沿いを歩いている

14

平穏な夜

永井の部屋

永井 観葉植物を見ている

ドアをノックする音

永井 ドアを開ける。有沢がいる

有沢 また来た。

永井 うん。

有沢 入って良い。

永井 良いよ。

二人、部屋に入り、適当に座る

有沢 思ったんだけど、何食ってるの。
永井 ……
有沢 生活感無いよね。こー。
永井 ……二酸化炭素と水。
有沢 死ぬよ。
永井 自給自足。自分で吐いた二酸化炭素を食って、自分で吸うための酸素を作るの。
有沢 ……良いんだ。
永井 ……でもね、足りない。
有沢 何が。
永井 ……酸素。
有沢 ……
永井 たまに息が出来なくなる。
有沢 ……
永井 ……
有沢 俺さ、
永井 何。
有沢 見てるよ。
永井 ……
有沢 ……よく見てるよ。
永井 哀しくなるよ。
有沢 哀しむよ。
永井 ……ありがとう。
有沢 飲まない。
永井 やめた。
有沢 ……いつ。
永井 昨日。
有沢 何で。
永井 酔っ払った。
有沢 ……
永井 気持ち悪かった。
色んなものがグルグル回って。
有沢 ……
永井 だからやめた。
有沢 そっか。
永井 うん。
有沢 ……泊まってるって良い。
永井 ……良いよ。

平穏な夜
永井の部屋、闇
ベッドの上には有沢が寝ている
永井は窓を開け、外を見ている

永井 知ってた。
私、目悪いんだよ。
有沢 知ってるよ。
永井 最近ね、コンタクトしてないの。
有沢 何で。
永井 なんかね、良い感じ。
有沢 何が。
永井 …見た感じ。
有沢 じゃあ、今、俺とかぼやくつと見えてんの。
永井 嘘だけじゃないよ。全部かぼやくつと見えてる。
有沢 …なんか卑怯じゃない。
永井 そう。
有沢 気持ち悪くない。
永井 そうでもない。
有沢 そう。
永井 月がね、丸かった。
有沢 …
永井 やつぱりね、丸かった。
有沢 月は丸いよ。
永井 …
有沢 変わらないもの。
永井 何。
有沢 聞いて。
有沢 …
永井 変わらないもの。
丸い月。
半分の月。
三日月。
有沢 …
有沢 …
永井 貞作。
有沢 今ので終わり。
永井 そう。
有沢 分かんない。
永井 踏み切りがついたの。だから、貞作。

有沢 いつから書いてんの。
永井 ……いつからだろ。
有沢 何で書くようになったの。
永井 ……自分を残したかったからかな。
有沢 ……
永井 自分を見てあげたかったからかな。
有沢 ……
永井 せめて、書いてあげたかった。
気が付いたら、書いてた。
そういうのも良いかなって。
何か、格好良いじゃん。

永井 噫だ。

16

熱い昼

川沿いをポリタンクを持った永井が歩いている
川の傍につき、ポリタンクを置き、地面に腰をおろす
目の前には、流されなかった紙の舟。舟には白い封筒がのつている

永井 漂ってる。
私が漂ってる。

夕暮れ

永井、立ち上がり、川に入り、流されなかった舟を集める
川からあがり、数えるように舟と封筒を落とす

永井 全部 ……流れない。
ここに私が全部ある。

永井、舟と封筒に灯油をかける

永井 供養してあげる。

永井、火をつける

永井 成仏して。

夜

永井、燃えきった舟と封筒をぞっと見ている
ふと何かに呼ばれたように、空を見て、その後で前を見る

18

腕を拡げて

永井 私を見て。…私だけを見て。
輝いてる。
意味なんてない。…なんとなく…なんとなくそうしたいの。

永井 灯油を自分の身体にかける

永井 川の中に入っていく

永井 私 灯籠みたいだ。

永井 腕を拡げる

たくさんの葉っぱと、その葉っぱが散って、枯れていく木

永井 自分の身体に火をつけ、燃える。

川の中で燃える炎

永井 多分 哀しむ人がいるでしょう。

ごめんなさい。

多分 知りたい人がいるでしょう。

許してください。

多分 後悔するでしょう。

馬鹿ですね。

多分 死ぬでしょう。

甘いですね。

17

いつもの屋

川

一隻の白い封筒がのった白い紙の舟が水面を漂っている

19

了